総　合　討　論

長野：以上の講演を聞いて頂き，コメンテーターのコメントをお願いします。

石田：モザイクの構造というものを考えたい。鳥類研究者あるいは鳥を保護するという立場から言うと，重松さんの講演は人間のレクレーション目的にとって何が最善かという事を中心にすえている考え方だと思う。それは里山にかぎらず森林の保全を考える上での一つの目的であって，社会全体であれば目的は数多くあり，また多様にあると思う。特定の鳥を保全する，あるいは特定の種を保全するという意味ではまた別の意味で目的があるという事から考えると，ある場所をどの目的に使うかという事を明らかにすることを外からは求められるのではないかと考える。

横浜自然観察の森では里山管理をするなかで，鳥類について周密な研究をしている。例を上げればヤマガラに足輪をつけて巣箱に来る鳥を年々おいつづける，あるいは周辺地域を含めてフクロウの個体数調査を行うなど大変興味深い事をしているので後で紹介して頂きたい。

外生菌根菌は，松茸は柴刈りをすることによって維持されてきたという話はよく知られているが，そういったメカニズムを紹介してくださった事は良かった。里山における役割あるいは，生態系における役割において鳥類や菌類は同じような立場にいるのではないかと思う。両者とも量的には大変小さい，ある意味では両者を無視してもなんらかの形で森林の形を作ることは可能であろう。しかし，鳥類や菌類は機能的な面で大事な役割を演じており，森林の質的な面の特性を決めているという視点からの見方もあると思う。

昆虫類の話は，論点として鳥類のアナロジカルだと思われる。ただ単に種類数ということだけでなく，やはりそれぞれの場所で特異的な種が生息していることも大事。同じことが鳥類においてもいえる。

守山氏の講演要旨や講演を聞き，フィルターブリッジという言葉を使っておられた。ある種の森林が飛び石の役目をはたしていることは重要である。森林の中から出てくる飛び石というものがあるが，それはまた帰っていく飛び石というものでもあるので，帰っていく飛び石という事についても考えてみると面白いと思う。

後藤：一口に里山というが，里山にも色々な形態があるものと思う。それぞれおやりになった研究がどの様な形態の里山での研究であるかという事を認識して，研究されているかどうかが疑問だ。それぞれの研究がどのように一般化できるものかどうかが知りたい。また，それぞれの研究の生態学的関連性について知りたい。里山の森林は農村と密接な関係があると思うが，森林のみでなく農村も含めた関係について考えるべきではないか。

長野：今後の研究課題として何を考えておられるか守山さんのお話をお聞きしたい。

守山：里山に住む生物のなかには，里山以外の環境も同時に利用しているものもたくさんいる。たとえばサシバは蛙や蛇などを食べるので，谷津田（山林の中にある水田）の環境がなければ里山の森林のみあってもサシバは生息できない。昆虫や他の生物についてもいえることと思うが，水田や草原なども含めて里山というものを研究していかねばならないと思う。

里山管理運動と鳥類の研究において，特に具体的な提案はないが，どういった環境にどういった

生物が生息しているかがわかっていない。つまり，どこにどういった生物を残していかねばならないか，といった環境計画がたてられない。過去（里山を利用していた時代）にどのような環境にどういった生物が生息していたかを知るため，文献を調べてみたが記録されている生物はその環境からみて珍しいから記録される例が多い。しかし，環境計画を考える場合にはそれぞれの生物が，その環境にあたりまえにいるようにする事が重要である。だから，あたりまえな生物があたりまえにいる状態を研究せねばならない。

長野：里山管理について，池長さんは独特の考えをお持ちですのでお聞きしたい。

池長：考え方として，原生林であれば，保護の方法は容易であろう。それは人間の影響をあたえるなという事と考える。しかし，里山は人間生活とのかかわりにおいて成り立ってきた生態系であろうと思う。すなわち，今後も人間の手で維持管理されなければその生態系は維持できない。では，その維持管理の方法であるが，昔ながらの方法で維持管理ができるかといえば必ずしもそうではない。そこでどのような維持管理をおこなわねばならないかということを考え，維持管理を行うことにどのような意味があるのかということを考えねばならないと思う。

昔私達が見ていた生物や里山の形態を見れなくなったことへの寂しさ，個人的にはそういったセンチメンタルなものから維持管理をしていこうと思いたつものかもしれない。しかし，他者を説得しようと考えるならば，これだけの種類のものがこのような環境に生息しており，これだけ減ったのだというような科学的なデータをもって語らねばならないと考える。

里山の問題というのは歴史的に見て農政の問題に根源があり，もしかするとそれが第一の問題であるかもしれない。しかし，そればかり言っていても何も解決しない。里山を維持管理せねばならないものか，といった議論もあろうかと思うが，何かアクションを行わねば里山を保全できないということの認識があるかどうかが気になる。さらになぜ種の多様性を重視し，滅ぼしてはいけないのかという考え方そのものについても方向を示す必要があろう。

石井：鳥にかかわる物質循環の話ですが，山から川へ色々なものが流され，最終的には海に到達してしまう。それを魚が食べて，その魚を食べる鳥が海から浜辺へ運び，他の鳥が浜辺から草原へ，そして山林へと運ぶことを繰り返している。では里山になぜ鳥がいるかといえば，エサとしての虫がいる。ひとつは大循環の一拠点としての位置づけを生態学の観点から考えることができる。つまり，里山の山林だけを守っても意味が無い。大循環を断ち切らないためには，飛び石としての緑地や草地や水田などが必要である。

これまで里山管理により守られてきた生物がいるのは事実だが，今後も同様の里山管理法を踏襲するのは危険であるというのが私の考えである。現在の里山は様々な生物の避難所としての価値をもっていると思う。そこで昔ながらの下刈りという手法で里山管理を行ってしまうと，収容能力が小さくなる。管理を行うのであれば，里山的管理ではなくて“生態学的管理”が良いと考える。つまり，キチンとした管理ではなくてトラ刈り的管理，どちらかといえばいいかげんな管理を行うのが良いと考える。

重松：私は造園学の分野に属するものですから，どうしても，里山も庭や都市公園と同じように手をかけて人工的なものにしてしまうタイプの人間と，みられてしまうようです。それほどでなくても「彼は美しさや楽しさのみを求めて里山管理を提唱している」と，思われているに違いありません。しかし，美しさや楽しさも，多様な野性植物

が四季折々に里山を彩り，また，その花蜜や果実，食草に依存して生きる様々な昆虫や野鳥，小動物の姿や鳴き声が聞こえてこそのものなのです。そこにこそ，庭や都市公園にはない里山の魅力があると考えています。ところで，里山をそのように種々の動植物の生活場所とするには，それぞれで要求する環境に違いがあるので，多様な環境をモザイク状に用意してやらねばなりません。毎年，伐採と下刈りが場所を違えて少しずつ行われていた，かつての薪炭林には，様々な再生段階と森林構造の林地がモザイク状に組み合わさっていました。こうすることによって，鎮守の森に棲むフクロウが，下草刈りされて開放的な雑木林の中を飛行し，アカネズミを捕獲することもできたのです。現在は里山管理の担い手がいなくなり，どこも自然遷移の進行によって密生状態となり，種組成るも貧化しています。私が提唱している里山管理運動というのは，一律的な「美しさ，楽しさ」だけが目的ではなく，生態学的な種の多様性を高め，あるいは回復するという目的とも連動しており，結構しっかりしたものだと安心していただきたいと思います。

江崎：里山をモザイク（里山管理運動によって）にしなさいという話がある。現状としては完全な理論づけを待たずに進んでいかねば対応は遅くなるだろう。とにかく人為的なモザイクを作ってみればよい。それが間違っていたとしても個々のハビタット単位を考えれば，回復力というものはあるであろう。少なくともこの環境がなければ絶滅するという生物についてはその生物が生息できるハビタットを残してやる必要がある。一方人間が作ってやらなくても森林にはモザイクがある。しかし，そのモザイクが個々の生物にどのようにかかわっているのかはよくわかっていない。エコロジカルマネジメントというものは，それを明らかにしたうえで，ある手法を使えば，生物にとって良いことですよという提案のされかたがなければならない。ただし，その時に注意しなければならないのは，行動圏の小さい虫のレベルからみれば例え話をすれば，スミレの花がそこに存在するという事が，ある虫の生息のために重要であるかもしれない。しかし，虫のレベルでみれば重要であったスミレの存在が鳥のレベルからみれば何ら重要な事ではなくなることがある。それがスミレであろうが，他の草であろうが，その木がコナラであろうがカシであろうがどちらでも良いこともある。では，こういったことがすべての鳥にあてはまるかといえば，そうではなく，行動圏が小さく一つのハビタットの中で生息できる種もいれば（鳥類から考えたハビタットのことで，当然虫レベルから見たら多様なハビタットの複合の中で生息している事になるが，この場合ではあえてこのような説明をした）先ほど話に出たサシバのように行動圏が大きく様々なハビタットがないと生息できない種もいる。つまり，個々の生物においてモザイクのスケールが違う。その生物の個々のスケールでモザイクというものを考えなければならない。その考えを広げれば里山の森林のモザイクのみでなく，その周辺の水田も含めたモザイクを考えていかねばならない。もしかしたら，虫でも鳥と同じような事がいえるのかもしれない。虫も鳥と同じようにその周辺にどのような環境があるかということが大切な場合もあるだろう。結論として言えば，個々の生物によってモザイクをつくりあげる。そして，里山を考えたとき，どのスケールにあわせても必ずモザイクになるようにしてやることが大切なことであろう。

石井：里山のような環境が無くなった場合，絶滅する鳥類があるものでしょうか。

江崎：意味を限定すれば，守山さんの研究がその答えであろう。林が変化すれば明らかに個体数が少なくなる種がある。しかしその後がわからない。

もしかしたら減りつづけて絶滅するかもしれない。それはなかなか短年の調査では明らかにできない。その場合，林のもつ構造の複雑さが重要な役割を果している可能性がある。だれでも（どの鳥でも）採食しやすい環境であれば，その中でとうぜん競争がおこる。もしかしたら，その複雑な構造が，資源要求の似ている種間の共存をゆるしていることがあり得る。

石井：鳥の場合，生活形が同じであれば食べる餌は何でも良いのではないでしょうか。たとえば植物上で葉を食べるイモムシ類というように生活形が同じであれば，それ以上種を限定しなくても問題ないのではないかと思う。照葉樹林では種数は多いが虫の密度は小さい。里山は昆虫の種数も個体数も多いので，鳥にとっては縄張りがコンパクトですむなど，収容能力が大きいと予想するがいかがでしょうか。

後藤：冒頭の質問について補足させて頂きます。私が，里山の森林以外の話を持ち出した理由について説明しますと，里山を管理しなくなったために，現在の里山はこのような形態に変わってしまったという，皆さんのおおまかな合意は得ているものと思います。では，里山の森林が変化したものか，それとも里山の森林をとりまく水田などの周辺環境も変化したのか，そして，これらの関連性を研究する事はたいへん重要と思います。なぜならば，現在の里山管理運動は物質循環や動物の生活史を無視した形で行われているのではないかという疑問があります。そのうえで今後どのような研究をしていけばよいかという質問でした。

重松：里山管理は農業と連動させなければ邪道だという考えがありますが，もちろん連動させることができれば理想的です。しかし，当面は部分的な実践運動や楽しみとしての農業でもない限り，無理でしょう。農業全体に里山管理との連動が復活するには，大多数の消費者が高価格，それに曲がったキュウリや虫食いのハクサイを受け入れるほどに賢く冷静になれるか，あるいは，いよいよ地球環境が危機的状態になり，石油も使用できなくなって，いやでも有機農法に転換せねばならないのか，どちらかが必要です。

生態学の先生の中には，市民による里山管理運動によって，全ての里山が伐採されたり，下刈りされようとしていると，心配される方もおられるようですが，市民がどんなに頑張ってもその作業量はしれたものであり，心配はありません。ほとんどの里山の森林が密生化し，常緑広葉樹林へ遷移しているわけですから，早急に里山管理運動を普及させて，できるところだけでもモザイク状の多様な環境を復活させねばならないのです。

里山にモザイク状の環境を復活させることのほかにも，里山管理運動には重要な意義があります。それは，現在の一般市民が里山と切り離された生活をしていることと関係しています。里山の価値や楽しさを知らず，また里山の自然に対する好奇心も育たないので，里山がゴルフ場開発されようが，里山にゴミが不法投棄されようが無関心になってしまうおそれがあるのです。一般市民が里山管理運動に参加することによって，その大切さや楽しさ，奥深さを認識するようになれば，自ずと里山の自然が守られるようになると思います。つまり，里山をゴルフ場開発等と引きかえにすることの損失の大きさを理解してもらえるのです。

佐久間：里山管理の手法は状況によって変化するものと考える。東京・横浜と京都では状況が少し違うだろう。つまり，東京や横浜のような都市の中に公園のような形で残っている場合と，京都府（北部や）南部のように面的に広がるアカマツ林・コナラ林としての里山では，管理手法も違い得るということだ。都市公園的な里山の場合は，タイムカプセルの様に動植物種を最も多く子孫に伝えることを目的とした管理の方法でもよいと思う。

つまり伐採・下刈りをしないということも一つの選択だ。しかし京都府南部のアカマツ林・コナラ林には別な状況として，マツ枯れの進行と竹林（主にモウソウチク）の拡大がある。こうした状況で伐採・下刈りをせず放置するのは危険なことだと考える。（管理停止後についての問題について述べれば）下刈りや伐採などの管理の停止によって，アカマツはやがて枯れ，常緑のカシ林に向かう変化を見せ始めるだろう。しかし，現在の里山には多くの場合シードソースとなるべき母樹がないため，常緑のカシは侵入できない。人里のアラカシが想定できるくらいだ（京都府南部には関東のように屋敷林としてシラカシが多い訳でもない）。スライドで紹介した里山（京都市上京区）の場合はマツ枯れ後ソヨゴが侵入している。ソヨゴが林冠を覆うと林内は暗くなり，後継種が定着することは考えにくい。こうしたある意味で歪んだ状態から，なんらかの形で本来の遷移の系列に戻るには今後見込みのつかないくらい時間がかかるだろう。

放置して自然の遷移にまかせると言っても，このような個別の状態を無視して里山の管理手法のみが一般化されるのであれば無理があるのではないか。

都市公園のような状況の場合，下刈りした環境も放置した環境も両方必要と考えるが，放置した環境が10年後そのままで維持できるかと考えれば，おそらくできないだろう。アカマツ林であれば，間違いなくやがて枯れてゆく。今はよくとも30年後を考えると，放置してある今の環境をそのまま保存することはできない（遷移がゆっくりとではあるが進むからである）。全体をトラガリ的に順にサイクルで下刈りをしていくのがよいだろう。

里山のモザイクと言うものに大変興味を持っている。私と同じ京都大学生態学研究センターの田端氏が研究していることの話をすれば，地形・地質の構造も森林のモザイクを構成する要素ではないかという考えがある。例を挙げれば（斜面の途中であっても）粘土層のような不透水層が地下にあることで水が染みだすことであり，そこには（湿った条件に対応して）ハンノキが生えてくる。このような環境のモザイクを含め幅広く，人為的影響（人間活動の影響）もふくめて里山を研究してみようという試みがある。里山研究会の伊東氏より話して頂く。

伊東：（里山研究会についての説明を行う）

佐久間：更新統の地形の上に成り立っている里山というものが（日本の都市近郊には多く）見られる。これが想像以上に複雑で豊かなものであることがわかった。心情的な背景にもなっているが，そういう経験をしたのは関西学術研究都市の建設予定地で，オオタカの生息を見いだしてからである。このようなごく平凡と思われる森林に，オオタカの様な貴重種が生息できる環境があるのかと正直我々は驚いていた部分がある。それをきっかけにその林を観察すると，植物についてもイヌセンブリの様な貴重種を見ることができ，身近な環境が実は大変多様で複雑な中身を持つことに気づかされた。ではこの里山という環境はどういう実態を持つのか，植物・動物を含め「里山」の研究をしてみようということで，この研究会はスタートしました。当面は先に挙げた環境のモザイク性の地，たとえば竹を中心とした研究を行う。かつてタケノコの生産は京都府南部でも大変盛んであったのだが，管理には重労働を要するため放置した農家が多い。結果，場合によっては人の侵入も困難なほどの（竹林内部で）密度の増加が起き，変化している。また周辺林分にもどんどんと侵入・拡大している。こうした拡大の速度や機構に関する研究を行う。

ホ乳類の研究ではウサギを取り上げ，生息密度，遊動域などを調べたい。ホ乳類に限らず全ての調査は共通の固定したフィールドで行う。まずはい

くつかの課題にしぼり，調査できるところから進めていこうという考えでいる。（里山の生物群衆を維持できるためにはどのような条件が必要か，サイズやモザイク性を含め調査を進めるが）里山の環境を維持していくにはどうような管理方法がよいのか，ということについてはもう少し研究が進まねばわからないことであろう。（たとえば，どの生物の，生活史のどこが，里山のどのような特質に，どの程度強く依存しているかなどの情報だ。そこには移動性や変化に対応する応答性も含まれる）

重松：人間が森林を破壊する前は，大阪平野も関東平野も原生林の樹海で覆われていました。そのような時代には，雷にともなう山火事や河川の氾濫などにより，モザイクの環境がつくられていたのです。しかし，人間がこれだけ開発しつくしてしまった時代では，自然の摂理にまかせた状態でモザイクのハビタットの成立を期待するのは無理だと思います。だからこそ，人間がそのハビタットを用意してやらねばならないのです。

人間が手をつけずにおれば常緑広葉樹林になるからよい，という考えがありますが，現実にはそれほど単純なものではありません。例えば，人間がコントロールしなくなった竹林では，周囲の雑木林に地下茎がどんどん勢力を広げていくようなことが起こっています。竹が占有するとほかの植物はなかなか入りこめません。やはり，いろんな側面から考えて，人間が里山を管理してやらねば，モザイクのハビタットを用意することは困難だと思います。もちろん，このモザイクのハビタットの中には，竹林や手を加えずに遷移にまかせる森林も含まれます。

里山管理運動で気をつけねばならないのは，人を引きつけるための管理という点で誤解してはならないことです。里山管理の基本は，間伐や下刈りによって林地に陽光を入れることによって，元元そこにあった植物，あるいは植物社会を回復させることです。消えてしまってなかなか再生しない場合は，ほかの里山を破壊しないことや遺伝子系統に注意して，よそから導入することも仕方がないと思います。しかし問題なのは，下刈りや間伐を行った後に市民が喜ぶだろうからと，アジサイやモミジなど里山の生態や景観に合わない，ちぐはぐな植物が植え込まれる例が珍しくないことです。私の本を読んでやったということを人づてに聞いた例もあるのですが，全く手前勝手な読みかたで破門ものです。

農業も自然破壊と言われますが，かつては農地の開発が水田やタメ池，かんがい用水路，棚田の石垣など，かえってハビタットの多様性を高め，景観に変化を加えて質を高めた，という側面もあります。問題は現在の農業が40から50年前の有機的なものと，全く異質なものになってしまったということです。農業の多用，コンクリートで三面ばりされた農業用水路，農業機械が操作しやすいようにだだっ広くされた水田，山はスギ・ヒノキ林と，以前と比較にならないものなのです。

石田：重松さんの行っている里山管理運動の価値については，この会場に来ている人はすでに承知している人々であり，おこなうことの意義について理解している。里山を管理することも必要という考えは，すでに社会的に認められているものと考えます。今日まで重松さんや守山さんが活動してこられて，では今後活動していくなかで，実際に活動するうえで何を基準にして新しい展開をはかっていけばよいかと考える場合，例えば，鳥類の生態を明らかにする事とか，貴重種を保護するためであるとかという事も目的にする場合に，何か話し合えることはないだろうかという事だと考えます。

横浜自然観察の森はよい例。水の多い環境とか山の上とか，それぞれの地域において異なった種

を選べるし，これでなくてはという統一基準があるわけではない。なぜ，その種やグループを観察対象に選んだのか，きっちりと説明できることは必要だろう。（フクロウなら「生態学的地位や食物連鎖の中での高さからフクロウの生息→生物の豊かさ」というようなこと，そんなにむずかしいことではない）方法としては，継続性つまり，きちんとした目的や方法が明らかになっていて，同一基準の調査方法や同質の結果を継続的に得られるような調査が望まれる。言いかえると管理の前と後，その後ずっと変化（無変化）を追跡できること。

木の実を食べる種や，どの実にどんな鳥が来るかはすでにかなり知られている。どんな木を残すとよいか，残すとどんな鳥が来るかは今ではわかってやっているでしょう。里山を餌場と考えて対処する部分については，例えば食物＝資源の量の問題などが残っている。ただ，量的な問題は市民の調査の手におえるかどうか疑問。それより鳥ならただ来た居るというのではなく，どのくらいの間居るとか，毎年来るのかとか，定住性や利用の安定度などを評価してはどうか。それは，その里山の環境質の高位を論ずることになる。（例　ビルの屋上でも実のなる木の鉢があればツグミやムクドリは来る）

江崎：日本は昔は一面の原生林であったに違いない。そこは当然ながら原生林の鳥がいて，それ以外の鳥は少なかったに違いない。一方，かつての水田は鳥類にとって実に良いハビタットであった。つまり，人間が干渉を与えることによってある種の鳥にとって好適な環境が生じていた。私達が頭の中で比較するのはそういった状態と現在を見比べているものであり，原生林の昔と比較をしているわけではない。原生林の鳥のみをバードウォッチャーにみせても，そのうちつまらなくてアクビをしてしまうであろう。人間の影響が入っていてこそ多様なものができていたと考える。しかし，現在は干渉の与え方が極端すぎる。それで減りつつある鳥類がいる。そういうふうに考えている。

たとえば水田のありかたも変わってしまった。冬の間は完全に乾田化してしまっている。そうすると湿地の鳥は生息できない。40～50年前は人間の干渉が鳥にとって適度に良い環境をつくりあげていたのかもしれない。しかし，現在はそれがあまりうまくいっていないようだ。

長野：里山管理は目的と手法が多用化すべきと考える。里山管理を行う場合，レクレーション目的，特定の種の保護目的，スプリングエフェメラルなどの保全目的など，何を目的とした管理かを明確にする必要があるものと考える。そして，その目的に合った手法を研究せねばならないようです。しかし，適切な管理方法を見つけだすのは大変難しく，まだ研究が進まねばわからない事でしょう。ただ言える事は，管理手法をいつも同じ事を行わず，フィールドを変えてあらゆる管理手法を行ってみるべきでしょう。当然の事ながら，ただ思いつきにより管理手法を変えるのでなく，きちんと根拠と目的をもったものでなくては意味がないと考えます。

今後の里山管理を行う場合，モザイクのスケールというものについて考えたい。モザイクのスケールも管理の目的によって変化するものと考える。昔ながらの管理手法を子孫に伝える事を目的とするならば，伝統にそった管理方法によりできあがるモザイクで良いと考える。しかし，種の多用化を目的とした場合，必ずしも伝統にそった管理手法が適切とは考えにくい。あらゆる生物にとってモザイクになるのが良いという考え方があるが，では具体的にどのようにしてモザイクを作れば良いのか。下草刈りもきれいに刈るのでなく，雑に刈るとか，荒っぽく管理するなどの方法を想像するが，よくわからない。また，原生林では巨木が

立ち枯れし腐敗していき広場ができて，モザイクをつくるケースがあるが，これらを応用する事はできないものだろうか。また，動物が腐敗することでできるパッチも応用できるのではないかと考える。しかし，このように考えていくと原生林のモザイクを基本に考えがちになってしまう。原生林より二次林の方がフォーナが豊かだとも言われる。その事から考えると，原生林のモザイクのコピーを里山に作ろうとするのもどうかと考える。鳥など動物は植物の種子を供給する役割もあり，いずれにしても，種子供給のポテンシャルを低下させるモザイク作りはさけねばならないでしょう。

里山管理を行う場合，動物について研究されている例は少なく，動物についての里山管理というものを考えたい。鳥について言えば，鳥を里山によぶために実のなる木を残すという管理が，直接鳥に影響する研究も良いと考えるが，里山管理を行う事によって，鳥の餌となりえる虫をどのようにして生息させるかなど，植物の管理を行う事による昆虫への影響，そして，それにともなう鳥への影響という植物の管理により間接的に与える鳥への影響についても研究したい。

今後の里山管理は，里山の周辺も含めて研究すると面白いようです。とくに，里山と鳥など動物について研究する場合，フィルターブリッジとしての役割について注目すべきでしょう。里山管理に，周辺の湿地であるとか谷津田であるとか草地など，里山以外の環境も含めて管理を行い，そうした結果，鳥は湿地や谷津田や草地と里山をどのように結びつけ，里山の動植物にどのような変化が現れるものか研究すると面白いようです。それは里山から出ていく研究のみでなく，里山に入ってくる研究も行うべきでしょう。

里山管理の研究を行う場合，管理を行う作業なども含めて多くの人々の協力が必要であり，特にアマチュア研究者による研究活動に期待したい。里山と里山管理という身近な研究課題がある事をお伝えする。